

コロナ対応外出自粛中に学ぶ③

「法灯を継ぐ」

高杉晋作と梅処（おうの）・梅仙・玉仙尼の3人の庵主

はじめに

令和2年（2020）は明治152年です。高杉晋作が、元治元年（1864）12月15日、長府功山寺で回天義挙の第一歩を踏み出し、その後の藩論統一から明治維新が実現しました。

1868年9月8日、「明治」と改元、今年は152年という節目の年を迎えました。これを機会に「動けば雷電の如く、発すれば風雨の如し…」と、称えられた高杉晋作の行動を振り返り、明治への胎動を学びたいと思います。

また、今年は高杉晋作の亡き東行庵を創設し、ひたすら法灯を守り受け継いだ人、初代庵主梅処尼（おうの）の112回忌。そして、梅処尼から法灯を引き継いだ2代庵主梅仙尼の62回忌、さらに、東行庵中興の祖と称えられた3代庵主谷玉仙尼が遷化され32回忌という年です。

この機会に高杉晋作の偉業に加え、3人の庵主の生涯をたどり、その功績を振り返えることにしました。

高杉晋作と「おうの」の出会い

・高杉晋作、関門海峡に登場

高杉晋作が関門海峡を舞台に行動を始めるのは、文久3年（1863）5月10日に始まった5回の攘夷戦、6月5日のフランス軍艦2隻による、前田砲撃上陸などに対処するため、藩主の命によるものでした。高杉晋作は、急きょ萩を発ち、下関の白石正一郎宅を訪ね、奇兵隊を創設したことに始まります。

「おうの」との出会いも、これ以後ですが、日時の断定はできていません。巡り合いの場所は、おそらく、奇兵隊を創設したものの、その維持・運営などに奔走し、その疲れをいやすひとときの、花街（裏町）であったと推察されます。

・“おうの”の出自は

「おうの」の出自については、生年月日も出身地も、これといったはっきりしたものは残っていません。本人もそれについて、何も語らなかったそうです。裏町の堺屋で此の糸（このいと）と称し、薄幸の身の上ながら、素直な芸者でした。それを、高杉晋作が身受けしたものです。以来、亡くなる慶應3年（1867）4月14日まで、4年にも満たない歳月が、2人の日々でした。

高杉晋作が亡くなって以後、明治42年（1909）まで、共に過ごした歳月の十倍に及ぶ42年間を、ただ一人、法灯を守り通した彼女は、出身がどうであれ、すばらしい生き方をした人として、称えるに余りある人物ということが出来ます。

・共に四国へ逃亡

高杉晋作の行動は、まさに東奔西走の日々でした。したがって、おうのとの逢瀬のときも、

多くはなかったことと思われませんが、唯一、共にひと時を過ごしたのは、「逃亡の旅」、慶應元年（1865）4月、大阪を経て四国へのおよそ一か月でした。

当時の下関は、北前船の中継港として海峡沿いには数百の間屋が軒を連ね、全国でも屈指の物資が集散する地で、繁栄していました。

ところが、この地は長府藩の領地であったことから、萩本藩は、換地を企んでいました。この換地論の先導者が、高杉晋作など本藩の武士であると目論んだ長府藩の武士が、つけねらうことになり、逃亡せざるを得なくなったのです。

大阪の書店では、本を求めたとき、船頭への変身を見破られるという危機を乗り越え、四国に渡った2人は、勤王の人日柳燕石（くさなぎえんせき）のところで世話になります。しかし、1か月もすると、身元が知れ渡り、急ぎよ脱出のときが来ました。追っ手が迫ったそのとき、2人はありったけのお金を座敷に撒き散らし、追っ手がその金に気をとられている瞬時に、難を逃れ、やっとの思いで下関へ向かっています。

逃亡の日々は安全ではなかったものの、おうのにとっては、高杉晋作とともに送る日々に、喜びを味わっていたことと思われま

・手紙に見るこまやかな心遣い

高杉晋作が「おうの」へあてた手紙は、この1通のみといわれています。慶應2年（1866）4月5日、長崎から下関のおうのへあてたものです。

「一筆申し遣し候、そなた事も無事にてめて度存候、あれら（われら）も無事長崎にまかりおり候間、御きずかい下されましく候、このたび伊藤さま御帰りにつき、何も御じきに御聞き下さるべく候、かねて申しおき候事相まもり、しんぼうかんようにござ候、人になぶられぬ事かんようにござ候、たんぜん裕送り候間、せんたくをして御送り下さるべく候、伊藤さまえ相頼みおき候間、拾両御請（うけ）取下さるべく候、あれら事もしんぼういたし候間、そなたもしんぼうかんよう（肝要）にござ候、しゃしんおくり候間、御請取下さるべく候、いろいろ申し遣したくござ候えども、まず惜しき筆とめ、あらあらかくのごとくござ候、めでたくかしこ

四月五日

尚々、風を引かぬようにようじんかんように存候、かしこ

この手紙は、高杉晋作のこまやかな心遣いが、よくあらわれています。裕を送って洗濯をして欲しいなど、おうのにとっては、拾両の小遣いや写真よりもうれしかったのではないのでしょうか。当時の拾両は、どんなに少なく見積もっても、現在の数十万円に相当します。写真も容易に撮影できる時代ではないことから、高杉晋作の、おうのを思う心もまた格別のものであったことを推察することができます。二人の間柄を知る、貴重な一通の手紙といえます。

・直様行く（すぐさまゆく）

慶應2年（1866）、いよいよ第2次幕長戦争が迫って来ると、高杉晋作は先手を打って、いち早く大島口の戦いに参戦します。そして、幕府の軍艦を攻撃し、下関に帰ってきます。

このとき、白石正一郎日記には、6月14日の項に

「今夜高杉大島郡より帰候由紅喜へ止宿、おうの直様行…」と、記しています。おうのは、白石正一郎から、高杉晋作が下関へ帰ったことを知らされると、すぐさま出かけたのでしょう。この「直様」の2文字は、高杉晋作の帰りを待ちこがれていたおうのの思を、よく現わしています。

高杉晋作の終焉と三人の女性

前述の幕長戦争は、いよいよ「小倉口の戦い」です。この戦いの最中に、高杉晋作は、病魔

におそわれます。体の不調を訴えたのは、慶應2年（1866）7月22日。白石正一郎の日記に「高杉不快」と記しています。海陸参謀の立場から、幕府軍と病魔との二つの戦いが始まったこととなります。幕府軍との戦いは、四境戦争と呼ばれ、小倉口の戦いのほか、石州津和野口、芸州広島との境、瀬戸内海大島での四か所で展開し、西洋式軍備を整えた長州藩は、12万人の幕府軍に対し4千人の軍事力で勝利しました。

しかし、病との戦いには勝てず、慶應3年（1867）4月14日、27歳と8か月の生涯を、現在の下関市新地町、林算九郎宅の離れ座敷で終えることになりました。

高杉晋作の病床には、おうの・雅子夫人・野村望東尼の三人の女性が看病に明け暮れました。

・名残の雪見を楽しむ

病床の近くで、もっとも長く世話をしたのは、おうのでした。

林算九郎宅の離れは、南側に小さな庭があり、梅の古木と灯籠や庭石が配置されていたといわれています。これを眺めて体調のよいときは、筆をとって笹などを描いたそうです。筆や墨は、今浦町にあった白石正一郎の分家で、文具を商った硯海堂こと白石良右衛門方から納めさせていました。画箋紙を広げ、墨をするのは、おうのの役目でした。世話になっている林家のためにと、「緑均堂」（ろくきんどう）と紙に書き、「些々生」と落款しています。高杉晋作のそばで墨をする、かいがいいおうのの姿が思い浮かびます。

また、日和のよい日には、見舞いに贈られた松の盆栽を縁先に持ち出し、眺めることもしていました。そのとき、見舞いの客が来て、淡い雪のようなものが松の枝に振り掛けてあるのを見つけ、これはなにかと尋ねました。

すると高杉晋作は、

「硯海堂が見舞いに持って来た<越乃雪>で、来年は雪見もできないであろうから、名残の雪見をしているのだ」と、ニッコリ笑って答えたといえます。

そこで、私事につき恐縮ですが、この「越乃雪」は、平成17年の春、戊辰戦争の戦跡を訪ねるため、資料収集をしていたときに、高杉晋作が名残の雪見をした日本三大銘菓の「越乃雪」という項目があり、おどろかされたものです。そして、誰が、見舞いに持って来たのかが長い間疑問でした。

ところが、本稿を書くために、島田昇平著『高杉とおうの』（1955年、東行庵発行）を読み、白石正一郎の分家で文具屋・白石良右衛門と、判明したのです。

「越乃雪」は、和三盆が原料で、新潟県長岡市柳原町：越乃雪本舗大和屋製造の日本三大銘菓の一つです。

高杉晋作の朋友・福田狭平が、慶応4年（1868）、戊辰戦争で長岡へ出陣し、戦地から白石正一郎へ<越乃雪>送っていることも、日記に記されていることから、よく知られていたことがわかります。



おうの

・萩で心を痛めた雅子夫人

雅子夫人は、高杉晋作が病気ではあっても、幼い長男・梅之進を連れて側に居たかったことは、推察にあまりありますが、肺結核の病がそうはさせてくれませんでした。遠地の萩で、心痛するばかりでした。

手紙のやりとりも、高杉晋作が「筆をとれば数か所胸が痛む…」などと記してくると、度々

出すこともありません。高杉晋作からの手紙では、父あてに、「大不幸中の一幸」と、長男を残したのが、せめてもの一つの孝行と記し、雅子夫人への手紙では、両親が世話になっていることに対して、礼を述べたりもしています。

高杉晋作没後50周年記念で出版された『日本及び日本人』の特集号に、亡くなる間際の様子を雅子夫人が語っています。大要を紹介しましょう。

「私は、高杉といっしょにいましたのは、ほんのわずかの間で、その間、東行はいつも外にばかり出ていましたうえに、亡くなりましたのが、未だ29歳（数え年）というほんの書生の時でございましたから、私はなんにも東行について、お話する記憶がございません。

そのうち、馬関で、東行が病気にかかりまして、だいぶひどいという知らせが参りましたので、私は両親といっしょに馬関に参りました。

東行は馬関の新地、林という家の奥の座敷に寝ていました。東行の病気は、ただ今の肺炎とでも申すような病気でごさしまして、私どもが参りました時は、もう、だいぶ悪くなったときで、たくさん、吐血をいたしました。ご飯も、おもゆくらいしかいただけませんので、もう、すっかり弱ってしまっていました。井上さんや福田さんなどが、よく訪ねてくださって、お話をしてくれました。東行は、自分の体は悪くなるし、それに引き換え、世間は、いよいよ騒々しくなるので、日に日に興奮するばかりで、いつも、いらいらしていました。

井上さんや福田さんに向かって、いつも、ここまでやったのだから、これからは、大事じゃ。しっかりやってくれろ。しっかりやってくれろ。といいつづけて亡くなりました。

家族のものには、別に遺言というものはありませんでした。しっかりやってくれろ、というのが遺言といえれば遺言でございましょう。

野村望東尼さんは、東行が亡くなるまで、それはそれは一通りならぬお世話をしてくださいました。

東行が亡くなりました時、歌を書いた短冊をくださって、これを是非、棺にいれて、いっしょに葬ってくれろ、とたのまれましたが、これは、とうとう、私が手ばなしかねて、今に保存いたしています。

その一つの歌に

ふでのうみすゞりの海もちかなから
えもふみなれぬ鳥のあとこれ 望 東
というのがありました。その裏に東行がいたずれ書
をしています。

あすあすと兼ねて心に思えども

昨日今日とは思わざりけり

と書いていました。

なんとなく、自分のことを自然に知っていたことのように思われます。

このように、高杉晋作との思い出を述懐し、なつかしんでいます。

この思い出から、雅子夫人は、病気がいよいよ重くなって、枕辺に来たことがわかります。このとき、おうのは、どうしていたのでしょうか。おそらく、身分の違いもあって、枕辺を雅子夫人に譲り、一步引き下がって心を痛めていたのではないのでしょうか。



雅子夫人

・和歌で心を通わせた野村望東尼

野村望東尼は、福岡藩の家臣野村新三郎貞貫の妻で、夫婦ともに大隈言道に師事し、歌作を競いあっていましたが、40歳の時に主人と平尾山荘に隠棲し、主人が亡くなったのち得度しています。

和歌の道に優れていましたが、さらに歌や国学を学ぶために京都へ行き、その地で勤王の人

と交わったことにより、帰国後、福岡藩の数少ない志士と親交を結ぶことになりました。

高杉晋作は、元治元年（1864）11月10日、九州へ同志を募るために訪れたもの思うようにことが運ばず、野村望東尼の平尾山荘を訪れ、10日間お世話になっています。

この十日間に、高杉晋作は60歳の野村望東尼を敬愛しました。また望東尼も、三人の子ども全てが早世したこともあって、母性愛の発露ともなり、高杉晋作がここを去るとき、自ら、羽織・袴・じゅばんまで縫って贈るほどでした。

別れるとき、野村望東尼は、

まこころをつくしのきぬは国のためたちかえるへき衣手にせよ
と詠っています。

のちに、野村望東尼は、高杉晋作など志士をかくまったことが、福岡藩からおとがめを受けることになり、慶應元年（1865）年11月、現在福岡県前原市沖の姫島に流罪となります。

それを知った高杉晋作は、次の年の9月17日、藤四郎など数名の使いを島に派遣し、屋外の木に囲まれたそまつな牢獄から救出し、下関に迎えています。

病床ながら二人は再会しました。野村望東尼は、以後、高杉晋作が息をひきとるまで枕辺で世話をしています。

おうのは、このとき22、3歳。60歳を過ぎた野村望東尼の訪れは、どんなに心強いことだったでしょう。

野村望東尼と高杉晋作は、ともに和歌を詠み心を通わせていました。高杉晋作が気分のいいときに、

「面白きこともなき世を面白く」

と詠むと、下の句を野村望東尼が

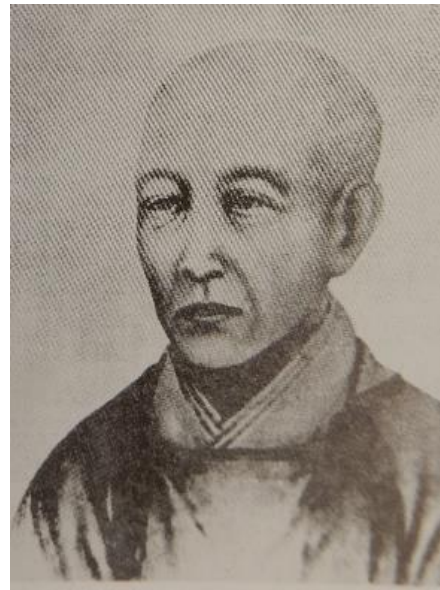
「住みなすものは心なりけり」

と継いでいます。

この、「面白きこともなき世を面白く 住みなすものは心なりけり」の歌は、平成19年3月、「そのとき歴史が動いた」のTV番組で、も一度聞いてみたいあの人の言葉で、第一位になりました。

野村望東尼は、高杉晋作亡きあと、現在の防府市に移り住んでいます。そして、防府天満宮で、討幕のため出征して行く諸隊士を見送るため、7日間参籠したことから病となり、62歳の生涯を閉じ、同市の桑山墓地に葬られています。

女性3人と高杉晋作の結びつきは、おうのにとっては女性としての愛情そのものであり、雅子夫人とは高杉家という家であり、野村望東尼にとっては勤王の同志であり、歌人としての交わりであったということが出来ます。



野村望東尼

●●42年間、法灯を守った初代庵主梅処尼

慶應3年（1867）4月14日、高杉晋作は、27歳8か月の生涯を閉じました。

葬儀は、16日、数千人が会葬し、吉田で神式により執り行われています。それは、白石正一郎などが一切を取り計ったことによります。墓は遺言により、吉田清水山に祭られ、高杉晋作の号から「東行墓」とのみ刻まれています。墓石の形は、神道をあらかわす四垂形で、国の史跡に指定されています。

（本人が記した墓誌銘は、葬儀ののちに判明したことによりそばには建っていませんが、平

成28年4月14日、高杉晋作150回忌記念事業として、高杉晋作陶像の近くに建立されています(います)

・おうの「梅処」と称す

おうのが、いつから梅処と称したかについては、高杉晋作の祥月命日の5月14日、吉田の庄屋末富虎次郎が記した日記に、

「5月14日雨、今日は東行君初命日に付、半七郎様（東行の父） 御留にて神式有之、時山様、梅処女（おうの）も七つ時（午後4時）着成候」とあり、すぐに「梅処」と称したことがわかります。

この「梅処」は、高杉晋作がこよなく梅を愛していたことから、自ら作っておうのに贈った茶杓の銘に、すでに「梅處」と記してあり、ここから、おうのが名乗ったものと、推察することができます。

・東行庵の礎を築く

高杉晋作は生前、おうのに、

「おれが死んだら墓守になれ、そうすればみんなも、おうのを見捨てはすまい」と言った、といわれています。

尼になるには、井上と伊藤が無理やりに彼女の髪を切って墓守にさせた、という説もありますが、高杉晋作を慕うおうのが、自ら選んだ道だったと思われまふ。それは、吉富簡一の書簡に、

「梅処事、大寧寺（現在の長門市）の弟子と相成、墓守致し度く兼て心事承り及候間」とあることから裏づけられます。

こうして、梅処は墓守を始めますが、そのときが何年であったかは判明していません。

現在東行庵のある地は、奇兵隊が慶應2年（1866）、小倉戦争から凱旋したのちに、山県有朋が「無隣庵」という建物を建て、妻友子（石川良平・のちに下関市長の娘）を迎えて新婚生活をしていました。その後、明治3年（1870）、山県有朋がヨーロッパへ外遊するに際し、その建物を梅処に贈り、住まわせています。

明治5年（1872）6月、明治天皇は、新政府の力を誇示し、民心を安定させるために下関にも行幸しています。このとき随行した山県有朋にたいして、梅処は「一生、高杉晋作の墓守としてこの地に住みたい」と、伝えています。

その願いを受け入れた山県有朋は、明治7年、無隣庵の隣接地をさらに買い求め、梅処に贈っています。

明治8年8月、梅処は、まだ鉄道のない時代に東京まで出かけています。それは、身寄りもなく、不安な生活をなんとか安定したものにするため、手を差し伸べてほしかったものと思えます。

東京で訪れたところは、井上馨のところでした。

井上馨は、梅処の上京の主旨をすぐに汲み取り、同士に寄付を呼びかけると、木戸孝允・山田顕義・山県有朋・河瀬真孝・井上馨が各40円を、さらに田中光顕・三浦梧楼・品川弥二郎・三好重臣・長三州・福原実・杉孫七郎・山尾庸三・林友幸などが加わり、その総額は750円に達しました。

こうして、生活の安定はできたものの、梅処は、まだ仏門への帰依はできていませんでした。般若心経を習い、朝夕そのお経を手向け、自適の生活をしてはいましたが、物足りないものがありました。

そこで、明治14年（1881）1月4日、曹洞宗総本山永平寺六十一世管長の久我環溪禅師が、長府功山寺に来られたとき、雪庵梅処尼の得度式を行ってもらい、正式に仏弟子となりました。

やっと心身ともに尼僧となり、その生涯を送ることになりました。

このとき、厨子入りの白衣観音菩薩像が贈られ、東行庵のご本尊になっています。

次には、東行庵建設という大事業です。これも、高杉晋作由縁の人々にすぎるよりほかにありません。

梅処尼は、再び東京の井上馨を訪ね、東行庵建設資金の寄付をお願いしています。その時の奉賀帳には、旧藩主毛利元昭公の55円を筆頭に、山県有朋・井上馨・山田顕義・伊藤博文・杉孫七郎など五十円が続き、品川弥二郎・三浦梧楼・豊永長吉・三條実美・など30円のほか、総勢143人が名前を連ね、総額は1549円となっています。

梅処尼は、この金額に感謝しながら、あらためて高杉晋作の成した仕事の偉大さを振り返るのでした。

こうして心身の安定のもと、淡々とした物事にこだわることのない、日々を送ったようです。回顧談は、いっさい話さなかったそうですが、高杉晋作とともに大阪を経て四国へ逃亡中に見つかって、逃げるときの恐ろしさは、忘れられなかったのか度々話していたそうです。

・旦那の碑が来ない、と待ちながら

正式に仏門に入り、東行庵という建物ができ、やっと梅処尼の生活も安定しましたが、二十代後半からの一人身のさみしさは、耐え難いものがあつたと推察されます。しかし、雅子夫人にはできない、自分一人が高杉晋作の菩提を弔うことができる、という喜びもかみしめていたことでしょう。

朝夕の勤行をつとめると、余裕の時間は、かつて身につけていた三味線や、舞い、琴などを地元・吉田の娘さんたちに教えていたといわれています。

明治42年(1909)、高杉晋作と福田侠平(高杉晋作の朋友)の顕彰碑が、清水山に出来ることになりました。福田侠平の碑はひとまわり小さいため、早く建立されました。

高杉晋作の顕彰碑は、あの有名な「動けば雷電のごとく、発すれば風雨のごとし…」と、伊藤博文が撰文し、杉孫七郎の書による威風堂々たるもので、東京で出来上がったものを列車で小月まで運び、その後、陸送されています。碑の石は、仙台から取り寄せたものといわれています。

この碑が大きいためになかなか届きません。梅処尼は、「旦那のが来ない、旦那のが来ない…」と、言いながら、生涯をとげ、遷化されました。

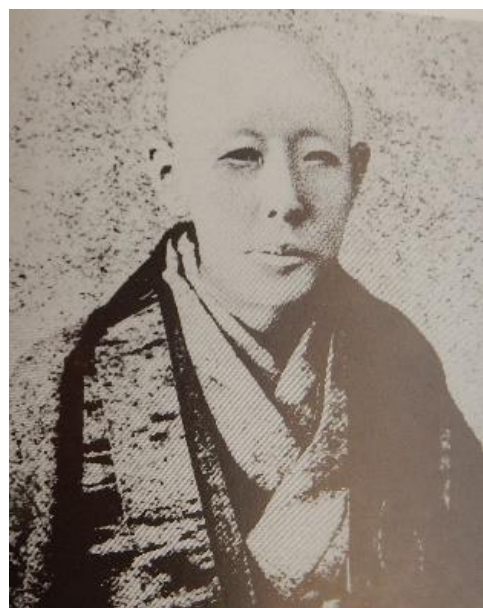
明治42年(1909)8月7日のことでした。

「高杉の碑文こそは、わしが書く」と自ら筆をとった伊藤博文も同年10月、ハルピンの駅頭で凶弾に倒れ、碑を見ることはできませんでした。

除幕式に、山県有朋は病気で出席できず、井上馨が除幕し、長時間にわたって演説しています。その中で

「忠・孝・信の三道を全うした高杉の意を受け継がざる者は、この碑の前に立つ資格なし」と結んだそうです。

高杉晋作の墓所「東行墓」の一段下に、梅処尼のお墓があります。このお墓は、梅処尼が生前に造っていたものを、同じ宗派の常閑寺に預けていたようで、墓標の形は僧形で「雪庵梅処尼首座(しゅそ)」と刻まれています。



初代庵主梅処尼

それにしても、見事な生涯の閉じようです。

東行墓の近くに、梅処尼の墓が設けられたのは、のちの人々の温かい心を見る思いがします。

平成20年(2008)、百回忌を迎えましたが、享年が何歳であったかは、正確にはわかりません。のちに作られた戸籍には次のように記されています。

谷ハイショ 天保十四年二月一日生

山口県厚狭郡吉田村第378番地 慶應3年9月10日 同県赤間関区後地村 入江和作二女分家入籍す

この戸籍の日付けは意味のないものながら、高杉晋作と死別したときは、24歳、享年は66歳となります。また「谷ハイショ」の谷は、高杉晋作が亡くなる年の3月、藩主の命により谷家を興したことにより、以後の庵主が谷を名乗りました。

出自さえわからなかった梅処尼が、高杉晋作の亡き後、42年間、あの寂しい吉田の里で、ひたすら高杉晋作の法灯を守りとおしたことは、高杉晋作をいかに尊敬し、愛していたかの、あらわれとすることができます。

二代目庵主谷梅仙尼

二代目の庵主梅仙尼は、戸籍もはっきりしています。大分県宇佐郡北馬城村岩崎に生まれ、末広家の長女でコスギといいました。

長門一ノ宮(現在一の宮本町)の福王寺で修行し、長府の功山寺探底禅師について精進ののち、明治31年(1898)に得度しています。

初代庵主梅処尼から東行庵への入庵を勧められ、二代目の庵主となりました。梅処尼同様、高杉晋作が梅を好んでいたことから、「梅」を重んじ「谷梅仙尼」と称しています。

東行庵へは、明治41年の暮れに入っていますから、先代との交わりは、わずかに8か月という短いものでした。梅処尼は脳卒中でしたから、3日間の患いで8月7日に遷化しています。急なことで、梅仙尼も聞き留めておきたいことがありながら、十分できなかったことが悔やまれたことでしょう。

梅仙尼の最初の仕事は、高杉晋作の顕彰碑建立と、除幕でした。碑の建立は、明治44年4月15日に竣工し、5月20日、毛利公や井上馨などが臨席し、盛大に除幕されました。梅仙尼にとっては、このうえない晴れやかな舞台でした。

顕彰碑建立の残金として6000円がじ、財団法人が設立されています。庵主の生活資金は、梅処尼の時代、明治の初めは月8円、のちに10円となり、梅仙尼の時代には15円から20円になっていたそうです。当時としては相当な高額であったと想像されますが、高杉晋作をとりまく人々の、心の温かさには感銘させられます。

東行庵庵主となって、いきなり大事業と立ち向かった梅仙尼でしたが、その後の生活の様子は、これといったものが残っていません。

この稿を記すに際し、吉田町で梅仙尼さんをご存知の神田アツ子さん、磯谷利昭さん、神田広造さん、佐野柁さんから、次のような思い出をお聞きしました。

- ・ 東行庵がただの一軒で、周囲に家は無く、子どもの遊び場所でした、喉がかわき、「水を飲ませてね」というと、梅仙尼さんが「ゴミを落としてはいけんぞな…」と、言っていました。
- ・ 2代目が来たとき、四国連合艦隊との講和会議に、高杉晋作が船につけて行ったという、白い旗を見せてもらったことがあります。年号が書いてありましたが、なんと書いてあったかは思い出せません。
- ・ お茶やお花を教えておられました。オモテでした。薄も濃茶もありました。
- ・ 三代さん(玉仙尼)は、体が弱かったものですから、卵焼きを作るときも、野菜を敷いて、その上に卵を乗せていました。ずいぶん気を遣っていましたね。
- ・ 寒行のお勤めで、吉田のまちを歩かれていました。あのお声が耳に残っています。

- ・梅仙尼さんは、ツバキの花を東行のお墓に、よくお供えしていました。
- ・梅仙尼さんの一番の功績は、のちに東行庵中興の祖と称された三代目庵主玉仙尼を育てたことです。

その三代目庵主谷玉仙尼は、梅仙尼について、

「昭和元年（1925）、あと継ぎとして、幼い私を迎えてくれました。庵のまわりには家はありません。寒に入ると山のキツネが庵のほつりをコンコンと鳴いて通るのです。〈あれは何の声か…〉と尋ねると、梅仙尼は〈犬だ犬だ〉と偽って、少しでも子どもの不安を除こうと懸命でした。そんなやさしい人でした。そのうち、新潟小出の尼僧学林・駒沢大学と学ばせてもらいました。

昭和20年になって私は、吉田へ戻ってきました。師匠梅仙尼は私に勉学の機会を与えてくれて、心から感謝しています」

と語っていました。

晩年の写真が数枚ありますが、いずれも腰をすこしかがませ、穏やかな顔をされています。初代梅処尼の晩年は、旦那の顕彰碑がまだ来ない、という心残りがありました。それに比べ、二代目梅仙尼の晩年は、三代目玉仙尼を立派に育てあげた満足感に満ち、おだやかな日々を送られていたと、推察することができます。

昭和34年7月9日に入寂され、享年81歳でした。

中興の祖・三代目庵主谷玉仙尼

・6歳で東行庵へ

谷玉仙尼は、本名を末成チカとっていました。大正9（1920）年1月18日、下関市外浜町3番地で出生。お父さんは、早鞆高校の前身、阿部高等技芸女学校の校長先生でした。ご両親の縁に恵まれず、小学校に入学するときには、お二人とも亡くなっておられました。

名池小学校1年生の秋のこと、末成邸を一人の尼僧が訪れ、話をしているときに、お茶をこぼしてしまいました。それを見ていた少女が、手際よくあと始末をし、にこやかに笑い、チョココンと頭をさげて行きました。このできごとが、末成チカさんの東行庵入りのきっかけとなったのです。

訪れていた尼僧は、東行庵二代目庵主の梅仙尼で、少女の所作に感心し、すでに東行庵入りの決まっていた男の子にかえて、弟子として迎えられたのです。

昭和元（1925）年12月、6歳の少女末成チカさんは、下関の街、外浜町からさみしい田舎の吉田、電灯もない東行庵へ移り住み、小学校1年の3学期から、吉田小学校へ通いました。

当時の吉田は、家の数も少なく、夜はキツネが庵の周りをコン・コンと鳴き、およそ4キロの小月までは、バスがあったものの、師匠の梅仙尼と少女は、いつもバスのあとを歩いたそうです。

その少女末成チカさんも14歳になると、仏門の世界に入る得度を終え、吉田を発って行くときがきました。新潟県の小出尼僧学林への入学。尼僧の学舎は雪の深い里にあり、春休みも雪解けを待たないと、下関へ帰れなかったそうです。

18歳で「谷玉仙」と名前を改め、病のために1年間の休学ののち20歳で尼僧学林を卒業。駒沢大学専門部仏教科へ入学。戦争が激しくなりつつあった昭和17年9月、繰り上げによって同大学を、最優秀の成績で卒業されています。

・26歳で、東行庵三代目庵主へ

昭和21（1946）年、谷玉仙尼は、晋山式を行い東行庵第三世庵主となり、いよいよ東行庵の切り盛りが始まりました。

昭和22年4月、吉田緑保育園を設立し、園長として保育園を経営、児童福祉への取り組みも始まりました。

以後、生涯の仕事として42年間、保育園を経営し、巣立っていった児童は、約千人を数え、親子二代にわたってお世話になった、という人も多くいます。

この業績は、厚生大臣表彰、死亡叙勲の従六位勲五等宝冠章の受章となっています。

・「高杉晋作百年祭」で東行に心酔

高杉晋作百年祭の大事業がめぐって来ました。昭和41（1966）年4月14日がその日で、数年前から準備が始まり、境内拡張・東行記念館建設などの資金として、6000万円を集めることが必要でした。知名士に会ってのお願いは、関西・関東と広範囲で、一か月のうち半月は庵を不在にしていたそうです。

ある人から、「高杉晋作はどんな人ですか」と尋ねられたのをきっかけに、猛烈に東行先生の詠んだ詩、日記、書簡を読破、結果は、いかめしい人ではなく、胸のすくような人、行動力に富んだ人だと心酔してしまいました。以来「私は高杉のために生きているのではない、仏に仕える尼僧だ…」という考えから一変、現在の若者に「ぜひ高杉晋作を見習ってほしい」と訴えるようになりました。

資金を集めての百年祭は終了。田園と山に囲まれた東行庵は、鉄筋コンクリート造り2階建ての東行記念館、茶室、東行池と周囲の風景を一新し、維新史の拠点、観光地として生まれ変わりました。

・多彩な事業を展開

百年祭以後、その行動力は「高杉晋作の生まれ変わり」とよばれるほどになってきました。

昭和46（1971）年、奇兵隊及び諸隊士慰霊墓地を開き、会津若松市など全国各地から隊士の墓を移葬。高さ18メートルの石造観世音菩薩立像まで建立しました。

この事業は、高杉晋作が桜山招魂場を創祀し、自分の呼びかけに応じたために、散っていった、奇兵隊士を弔ったことを受け継いだもので、高杉晋作の曾孫勝氏が「故庵主の数々の業績で、私が最も尊敬し感激もしたことは、奇兵隊士ほか諸隊士の慰霊供養の仕事です。庵主は実に丹念に墓石と遺骨を集め、手厚く供養してくれました。庵主のこの宗教人としての立派な行為のおかげで、晋作の子孫として感じていた私の責任も、ずいぶんと軽くなったような気がします」と語っています。

多くの人を感動させた事業に、昭和51年の「東行百十年祭記念“薪能”」があります。前夜までの雨がやみ、吉田の里に鼓がひびきわたり、演目は「船弁慶」。満月が山の端に生じる様は、薪能の真髄、その感動は、参集した人の語り草となっています。

昭和53年、教化事業として『東行庵だより』（季刊）を創刊。この稿を記す私も、55号までお手伝いをさせていただいたことは、このうえなくありがたく、貴重な思い出がいっぱいです。

この年、東行庵初代庵主梅処尼70回忌記念事業として“菖蒲祭り”を開催。昭和61（1986）年には、高杉晋作百二十年祭記念事業として、“維新・海峡ウオーク”を開催。この催しは現在もなお続いて開催され、毎年2万人が参加し、下関の春を告げる風物詩となり、すっかり定着しています。

平成元年、高杉晋作生誕150年記念事業として始まったのが“曲水の宴”です。衣冠装束に着飾り、流れ来る杯を前に一句詠むという平安の雅が、東行庵の梅林に展開されました。この催しは数年続けられたのち、残念ながら中止となっています。

これらの催しのほか、尼僧団創立35周年記念事業として、禅院茶礼・大茶盛・名僧遺墨展の「茶と禅のつどい」。高杉晋作120回忌記念として高杉晋作の道中三味線を聴く会、谷玉仙尼入庵60年を記念しての福原百之助家元、杵屋佐吉家元による「肅月吹笛の会」。高杉晋作

生誕150年記念「維新の英傑・高杉晋作展」(会場・下関大丸)など、記念となる節目の年には、必ず大きな催しを開催しています。

こうして多くの人々に東行庵を知っていただくと共に、高杉晋作の顕彰を常に心がけておられました。

・活動範囲はカンボジアまで

昭和54年(1979)年、曹洞宗尼僧団から、海外宗教事業視察員を委嘱され、カンボジア難民キャンプを訪問。

帰国後、写真展を開催し、実情を訴えて募金活動を展開。やがて全国からの協力金400万円をアジア難民救済会へ贈り、次の年には、再びカンボジア難民キャンプを訪れ、ハシカワクチンの代金を届けると共に、曹洞宗尼僧団からカンボジア難民救済ボランティア団員を送っています。

各種のボランティア活動と取り組んでおられましたが、殊のほか難民の救済には心を尽くされ、その実績は外務大臣から感謝状の贈呈ともなっています。

・教育委員などでも活躍

カンボジアへ行かれたときは、曹洞宗尼僧団の副団長でしたが、昭和60(1985)年から4年間にわたり団長を務め、全国各地を駆け巡り、曹洞宗尼僧団の振興に取り組まれました。

昭和61年には、下関市の婦人団体連絡協議会を結成し、会長となり、婦人の地位の向上に努め、昭和62年には下関市教育委員会委員に就任。その任期なかばで逝去されました。後で思えば、名残を惜しむかのようなできごとがありました。

時は、亡くなられる4日前、9月27日のことでした。通常、教育委員会の開催は、市役所庁舎の委員会棟で開催されますが、その日は、東行庵からほど近い吉田公民館で開催されました。これは特別のことで、終了後「珍しいお酒がありますから、東行庵へどうぞ」と、委員全員をお招きし、楽しいひとときを過ごされたのです。お別れの時を予感されておられたのであろうと、思われます。

・惜しまれた遷化

高杉晋作の生まれ代わり、東行庵中興の祖、と称された谷玉仙尼でしたが、持病の喘息にはうち勝つことができず、平成元年(1989)10月1日、遷化されました。葬儀では、9人のかたが弔辞を述べ、その業績を称えました。

親交のあった直木賞作家の古川薫さんは、

「あなたが6歳で東行庵の子となられたころ、そこはまだ草深い墓守の庵でした。梅仙尼の慈愛に満ちた育みのなかで、あなたは初代梅処尼の分身となる転生のときを迎え、その穢れなく美しい女身を仏門に捧げる一生を踏み出されました。今や東行庵は輝きを帯びた歴史の殿堂となり、英雄高杉晋作を現世によみがえらせ、おびただしい人々を引き寄せています。

あなたのその全身、あなたのまごころ、あなたの情熱。あなたの生涯すべては、高杉晋作のためにありました。あなたが築かれた東行庵のいしづえは、最早ゆるぎなく、あとは谷玉仙尼の遺志を継ぐふるさと人が、立派に東行先生の奥津城を護って行くであります」と、お別れの言葉を贈っています。

・多くの語録

谷玉仙尼は、宗教人として多くの言葉を残し、現在なお私たちを導いてくださっています。

その中から、ご紹介しましょう。

「かなしみのかげをひいている。ということは、かなしみのわからない人間では駄目なの

だ。かなしみ、苦しみ、悩みがあつてこそ、人生の余韻が伝わり、かなしみのかげがあつてこそ、その人の美しさも更に増し、人の心をひきつけるのだと思う。

そして、うららかであつて、この人に会っていると、なんとなくしっくりと、しかも晴々、ほのぼのとしたものを感じる。こんな人間になりたいものだし、一生を修行者として生きてゆくなら、どんな事に遭い、どんな場面にあつても、その場その場を充実して、一日一日を最善に、しかも光りを放って生きたい」

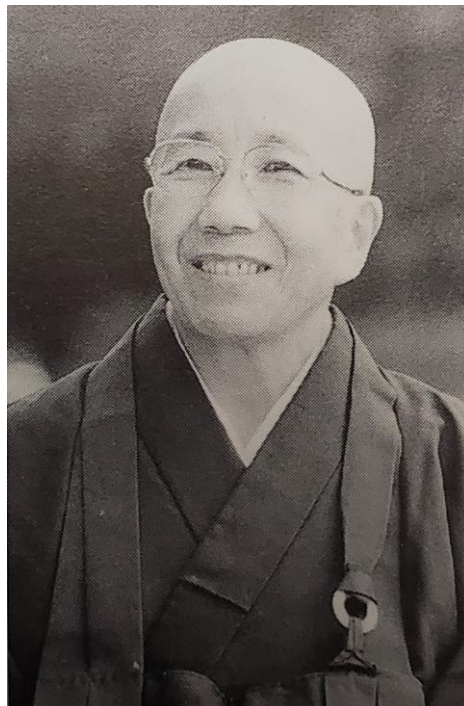
「人間は、自然といっしょに、四季の運行を共にして行くのが本来の姿です。自然とともに生きること、生かされていることを忘れて、なんでも自由にできるという錯覚にとらわれてしまいがちですが、動物や植物から見れば暴君ですよ、やはり、天地といっしょに運行して、自然のなかのひとつだということを忘れず、互いを思いやりながら生きなければ……」

「私たちは人に接する“柔軟心”が一番大切なんです。ぐにやぐにやと柔らかいんじゃなくて、そこには粘りもあり、張りもあり、反発力も持ち合わせた“しなやかに、したたかに、そして、つややかに”。

私は、人間は頑固じゃあしかたがないと思うんです。“我こそは、って、片意地をはっても弱いものです。自分の我を捨てて、虚心になって、無心にならないと”

と、語っています。

令和3年（2021）10月1日には、東行庵三世中興春林玉仙大和尚の33回忌を迎えます。そのお姿を偲ぶとともに、生き方を学びたいものです。



第3代庵主谷玉仙尼